地理空間　1-1　53-70　2008

アホウドリと「帝国」日本の拡大

平岡昭利
下関市立大学　経済学部

行為論で人間行動を解釈する視点から，明治期，日本人の南洋進出の行為目的は，アホウドリであったと想定し，それを追った行動が「帝国」日本の領域拡大につながったことを検討した。アホウドリは小笠原諸島では早くから認識され，1885 年頃には羽毛が外国に輸出されていた。鳥島でアホウドリ撲殺事業を始めた玉置半右衛門は，巨利を得て実業家となり榎本武揚などの南進論者と深くかかわっていた。当時，無人島開拓などの新聞小説が広く読まれるなか，開拓事業に成功した玉置は数々の書物に取り上げられ，無人島探検ブームの一因となった。このブームの中，アホウドリから莫大な利益がもたらされることを認識した人々は，当時の地図に数多く描かれていた疑存島の探検に競って乗り出し，権利獲得競争の果てというべきガンジス島問題も発生した。このようにアホウドリから一攫千金を目論む山師的な人々の行動が，「帝国」日本の領域を東へ，南へと拡大したことを明らかにした。
キーワード：行為目的，アホウドリ，疑存島，領域拡大，南洋

Ⅰ　はじめに

長い鎖国から解放された明治期，多くの日本人が小さな船で大海原を越えて南洋へと進出した。数々の危険を冒してまで，なぜ，何の目的をもって人々は南の島々に向かったのであろうか，という疑問から本研究は出発した。というのも，人間の移動や拡散現象は，古くから地理学の主要なテーマの一つであるが，研究の多くが現象の移動ルートや空間配置を問題にし，なぜ，どうしてといった因果関係を明らかにしてきたとは言い難い。そもそも，日本の地理学研究の多くは，現象の結果分析からの規則性の把握が中心であり，現象の原因，本質的な理解へのアプローチが希薄だったと考える。

このため，筆者は行為論的な視点から人間行動，さらに地理的現象を解釈する必要を感じ[1]，その視座から，一例であるが日本人の南洋の島々への進出の行為目的は，「アホウドリ[2]」の捕獲であったと想定し，その背景を探る作業を続けてきた。その結果，日本人のアホウドリの捕獲という行動は，空間的に非常に広範囲にわたっていたことが明らかになった[3]。本研究は，日本人のアホウドリを追い求めた行動が「帝国」日本の領域拡大につながったことを実証する。

Ⅱ　アホウドリ ―「南進」への行為目的 ―

1. 小笠原諸島の領有 ―「南進」へのプロローグ

「六十余州」という閉鎖的な領土意識から解放された明治初期（田中 1993），日本人の活動は活発化し，その行動範囲は急速に拡大した。まず，人々が目指したのは北の北海道であったが，南の小笠原諸島も注目された。

小笠原諸島は，江戸時代の文久年間（1861~1864）に幕府により一時領有化され開拓が始められたが，政治状況の急変で，わずか 1 年足らずで放棄された経緯がある（東京都 1972）。明治に入ってすぐに外務権少丞の宮本守成が，さらに民間人の谷暘卿（ようけい）が小笠原開拓を建議した[4]。

1875（明治 8）年になって，政府は小笠原諸島の再統治を決定し（津下 1934），外務省四等出仕の田辺太一に命じ明治丸を派遣した。この時，遠

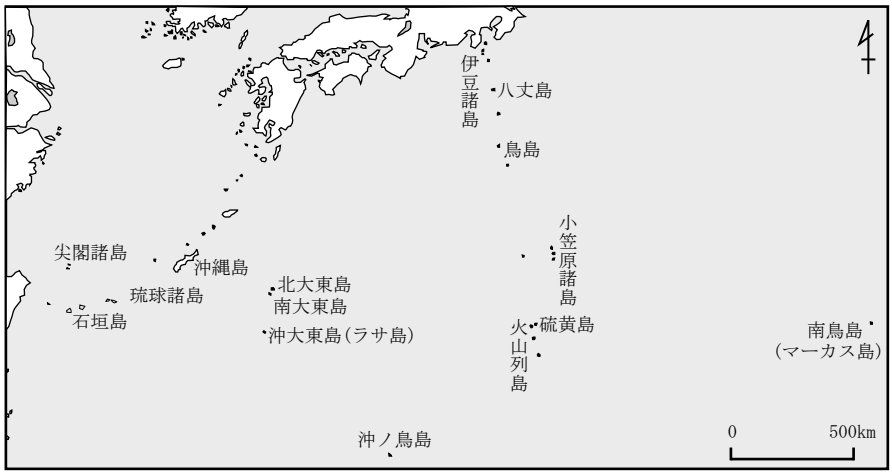

図1　日本の南の島々

く異国の地，サンクトペテルブルグでロシアとの領土交渉に当たっていた榎本武揚は，これに大いに賛意を示し，具体的な殖民方法としてキニーネ，コーヒー，タバコの栽培と政治犯の移住などを右大臣の岩倉具視に建言した[5)]。

1876年，政府は小笠原諸島を外務省の所管とし，各国に同島の日本領有を通告した。同年，後の小笠原出張所長小花作助ら官吏17名を含む27名を小笠原に派遣したが，その中に官舎新築請負人として八丈島出身の大工，玉置半右衛門がいた。後に鳥島や大東島を開拓し巨万の富を入手する玉置は，文久年間の幕府の小笠原開拓にも従事しており（田中1983:233），13年ぶりの小笠原再上陸であった。棟梁格である彼の配下には8名の大工や人足がいたが，その多くが後に小笠原諸島の父島に移住した[6)]。

その後，玉置は小笠原と内地を頻繁に往復し（鈴木1991），官舎の建築ばかりでなく開墾事業にも乗り出している。また，島内の食糧販売など必需品の独占的な取り扱いを行っており，移住民が急増するなかで，彼は小笠原出張所に物資の購入資金の融資を願い出ている。これについて内務省庶務係，会計局は，営利目的とした公的資金の融資は問題があるとして却下した（鈴木1990:55）。以後，玉置は独占的な官舎の建設や物資の取り扱いから手を引き，彼の履歴書にも「…聊カ私見込ト出張所ノ御主意ト相異ナル廉有之，不得已明治十三年ニ至リ，断前帰京ノ儀ヲ立チ…」（東京都1991:543）と記しており，小笠原を引き揚げたのである。

郷里の八丈島に帰った玉置は，特産である黄八丈などの商いや回船業を営んでいたが，1881（明治14）年に来島した自由民権運動家，奨匡社（しょうきょうしゃ）の松沢求作や松岡好一らが，三井物産や島役人の独占的貿易に対抗して設立した「南島開島社」（中島1974，1991）にかかわり[7)]，後に鳥島で松岡と行動を共にすることとなる。

1876年の再領有以降，小笠原諸島へは，八丈島を起点にして人々が移動する（奥山1986）とともに，全国各地からも一攫千金をもくろむ人々が，この新天地に流入した。

2. アホウドリと鳥島の領有

1）小笠原諸島のアホウドリ

小笠原諸島における初期の開拓は，海亀，有用材，キクラゲ，山藍など天然資源の略奪的な搾取

図2　アホウドリの挿絵
（磯村貞吉『小笠原島要覧』, 1888年, 270頁より）

から始まったが，同時にアホウドリも捕獲された（倉田1983:196）。同諸島のアホウドリについては，1774（安永3）年の「小笠原島通船之事並国嶋之図[8]」の説明書きに「白鳥ノ形チニテ大サ両羽三間程ノ大鳥アリ」との記述が見られるのが最初である。馬鹿鳥，信天翁（舜天翁），藤九郎などとも呼ばれるアホウドリは，小笠原諸島の至る所で生息し，『小笠原島新誌』（大槻1875:25）には，「…海陸鳥類少ナシ，其多キハ信天翁ナリ…（傍点筆者）」との記述がある。

また1875年12月，小笠原出張所長の小花作助は，内務卿の大久保利通に宛て「小笠原父島ヨリ北ノ方…（中略）…ケータ島ト唱ヘ候，厳石ノ小島アリ…（中略）…同島ニハ樹木ハ稀少ニ候得共，港湾モ有之且舜天翁，或ハ，トークロート唱候海鳥群ヲナシ，其糞モ数年来ヲ経テ堆キ趣ニ付向後国産ノ一端ニモ可相成ト存候…（傍点筆者）」（農林省1958:461）とし，小笠原諸島の一つである聟島（むこしま）（ケータ島）にもアホウドリが群棲していたことが記されている。さらに鳥糞（グアノ）にも言及しており，その先見性には驚かされる。

明治10年代に入ると急激に移住者が増加し，多くのアホウドリが捕獲され，肉は乾燥させて食糧に，卵は本土に輸出された（小笠原島庁1888:274）。このためアホウドリは減少し，『小笠原要覧』（磯村1888:271）には「…往昔は父母両島を始，諸島に多く住み人を恐れざる故，之を手捕にし，今は父母列島には全く其影失せり…（傍点筆者）」（図2）と述べられ，小笠原諸島では北の聟島諸島に生息するだけとなった。なお，その利用法について「…又其羽毛は一度曹達にて洗ひ臭気を取り去る上，米国へ輸出せば相当の利益アリ…（傍点筆者）」とあり，すでに1885（明治18）年頃にはアホウドリの羽毛が輸出されていたことがわかる。

以上のように小笠原諸島においては，その領有以前からアホウドリは認識された鳥であったが，領有以後，捕獲され尽くしほとんど見られなくなったのである。

2）鳥島領有へ

伊豆諸島最南端の鳥島は，近世，小笠原諸島とともに日本の領域外の無人島であった。1675（延宝3）年に幕府の命を受けた島谷市左衛門が無人島（小笠原）探検を行った。その時に作成された「延宝三年伊豆諸島調査海路図[9]」には，鳥島は小笠原九十四島のうちの一つ「亀島」として記載され，島谷家に伝わる「小笠原島図[10]」（図3）にも同様の記載があり，小笠原諸島と同じ赤で着色されている。また，1858年頃に近藤富蔵が著した69巻から成る八丈島の地誌『八丈実記』（宮本ほか1968）にも記述され，さらに奇跡的に生還した漂流者「ジョン万次郎」などの証言によって，島の存在は認識されていた（井伏1964）。

図3 「小笠原島図」嶋谷家所伝
（神戸市立博物館所蔵）図の上が南である.

明治10年代に入ると，鳥島の近くを小笠原航路が通ることにより十分に認識された島となるなかで，1882（明治15）年，鹿児島の林太助によって無人島発見届が東京府に提出された[11]。府は内務卿山田顕義に「其所属判断致シ兼候ニ付，地理局ヘモ再応照会致候得共，…（中略）…版図外トモ不被察候得共，何分確認スベキモノ無之ニ付…」と，指揮を仰ぐ上申書を提出した。これに対し山田は「書面何之趣ハ島嶼ノ経緯度ヲ精測シ，其所在ヲ確定シテ伺出ルニアラサレハ何分ノ指揮難及他事…」（東京都 1991:529）と東京府に回答しており，この時点で政府内では鳥島について把握していなかった。

ただ，この鳥島をめぐる民間人の開拓の動きは早く，1887（明治20）年6月には，学農社農学校の津田仙が「此島ニハ舜天翁ト相唱候海鳥群集シ，数百年堆積致候夥敷鳥糞有之候[12]…（傍点筆者）」とし，この鳥糞は，アメリカにおいてグアノと称される最高の肥料であることを指摘したうえ，鳥島に上陸し鳥糞のサンプルを採取するため，小笠原行きの汽船の停船を願う上申書を東京府に提出した。

以上のような鳥島の帰属や開拓の気運が高まるなかで，無数に群棲しているアホウドリに着目した玉置半右衛門は「鳥島拝借並ニ定期船御寄島願[13]」を東京府に提出，牧畜のため[14]の10年間の鳥島の借地と定期船の寄島を申し出た（望月 1992）。これに対し東京府は，鳥島の位置も確定していないので借地の許可はできないが，「未タ何レノ版図ニモ属セサル島嶼ニ向テ我人民ヨリ始メテ事業ヲ起スハ素ヨリ差支無之儀ト認候…」（東京都 1991:653）として，鳥島への寄島は乗船代金を支払う条件で許可したのである。

1887（明治20）年11月，逓信省の灯台巡視船である「明治丸」が，横尾東作[15]らの南洋探検に使用されたが（河東田 1917），これに玉置らも乗船したのである。横尾のほか東京府知事の高崎五六，鈴木経勲[16]などの官吏，山名次郎，渡辺義方などの新聞記者，玉置とかかわりのある服部徹，依岡省三，松岡好一らが乗船し，総勢40余名に及んだ（竹下 1943:14）。

明治丸は，11月1日に横浜を出港，途中，鳥島で玉置・松岡ら13名を下船させ，硫黄島まで南下した（明治丸史編集部会 1982）。一行の硫黄島上陸後，明治丸は引き返し，北上，鳥島に再寄島し，玉置らを乗船させる予定であった[17]が，風波が強く，玉置らを鳥島に残したまま横浜に帰港した。新聞各紙は，これを「絶海の孤島の置き去り事件」として報道し[18]，とりわけ志賀重昂が強く東京府を批判したことなどにより，府は補助金を使用し，鳥島の玉置らの救助のため日本郵

船の「芳野丸」を差し向けることとなった。この鳥島行きを強く希望したのは志賀本人であり[19]，彼は，この航海の様子を「近南洋紀行」に記しており，玉置らの行動に対して「…這般の満足の最大なるのは，彼等が能く外洋遠征の先鞭を着け，一山一水の間に跼蹐せる懦夫惰夫長眠を攪破したる是なり」(志賀 1889:130) と最大級の賞賛を送ったのである。

だが，鳥島から志賀とともに帰港したのは，玉置と松岡の 2 人だけであり，残り 11 名は当初の予定通り島に残り，アホウドリの撲殺事業[20] と開墾作業を続けた。その後，玉置は 1888（明治 21）年 1 月に「鳥島拝借御願書」を東京府に提出，30 年間の借地とアホウドリ捕獲などの許可を求めた。

これを受けた東京府は，内務大臣に「島嶼所属之儀ニ付稟議案」を提出し，鳥島の位置については，玉置の申し立て通りとして「到底 版図内ニ属スル島嶼ト存候間，貴省吏員御派遣，経緯度等精測之上 所属御指揮有之度…」（東京都 1991:528）と上申した。これに対する内務省からの回答はなかったが，同省は約 2 カ月後，玉置の鳥島の借地を認めた。しかも地代が無料という破格の条件であった。東京府が内務省に照会した島嶼の所属問題は，すでに玉置による事業が行われていることから，その必要がなかったともいえるが，行政機関の所属がないまま，鳥島は玉置がアホウドリ撲殺事業を経営する島として放置されることになった。鳥島が小笠原島庁の所属になるのは 1897（明治 30）年のことである[21]。

3. 玉置半右衛門と榎本武揚を取り巻く人々

前述の明治丸を使用した横尾の南洋探検を側面から支援したのは，旧幕臣で明治政府内の要職を歴任する榎本武揚である。彼は早くから南洋に関心を示し，小笠原回収（再領有）では殖民を，1876（明治 9）年にはラドローン群島（マリアナ諸島）などの南洋群島の買収を建議（高村 1999），79 年には東京地学協会を設立する（山室編 2006）など「南進論」の象徴的な存在であった（清水 1991）。

横尾の探検は，硫黄島の確認程度の成果しかなかったものの，明治丸の航海が与えた影響は大きく，これを契機に榎本を中心とする南進グループは，一層つながりを深めた。特にアホウドリの捕獲によって巨利を得た玉置半右衛門は，榎本や彼を取り巻く人々や，また「孤島の置き去り事件」とアピールした志賀重昂とは非常に親密な関係となった[22]。志賀は 1906（明治 39）年に玉置が開拓した南大東島まで出向き（志賀 1909:947-957），後に玉置を称える碑文まで書いている[23]。鳥島で玉置と行動を共にした松岡好一は，帰京後，志賀や三宅雪嶺の主催する政教社に入社し，雑誌『日本人』の編集に従事，「高島炭鉱坑夫虐殺問題」を告発したことは有名である。また，服部 徹や依岡省三らも榎本や玉置との親交を深め，服部は，この探検をもとに『日本之南洋』(1888 年，南洋堂）を刊行し，依岡省三も探検の翌年に硫黄島に再上陸し（入江 1942:152），玉置の支援のもとに開拓を企てている（岡 1936:12）。

1890（明治 23）年には田口卯吉が士族授産金で南島商会を組織し，鈴木経勲らと南洋貿易を行い，また横尾東作も南洋貿易の商社，恒信社を設立したが，榎本は前者にかかわり（田口 2000），後者には支援を惜しまなかった（青柳 1981）。翌 91 年 5 月，榎本は外務大臣に就任，9 月には軍艦「比叡」がグアム，ニューカレドニア，オーストラリアへ約半年間の遠洋航海へ出港したが，これに依岡省三，松岡好一[24]，三宅雪嶺，後にニューカレドニアの出稼ぎ移民調査を行った富山駒吉，玉置配下の安井万吉らが乗船していた（本庄 1942）。このように榎本を中心とし，彼を取り

巻く南進グループの行動は急速に拡大した。

また，榎本は1893（明治26）年には，移住，殖産事業の普及のため殖民協会を設立（児玉1987），その発会までに入会資格などを審査する成立議員を選出した（殖民協会1893）。委員は議員，政治家や著名なジャーナリストなどが大半であったが，その中では異色といえる玉置半右衛門もいた。会員は月額50銭とかなり高額な会費を払う必要があり，社会的地位が高いことが要求されていた（古舘1979，武田1988）。設立には寄付金も集められたが，会長である榎本の30円，星亨の20円は別格として，志賀重昂の7円，田口卯吉の5円，三宅雪嶺の3円に続いて，玉置も2円を寄付している。1888年の鳥島上陸から，わずか5年，アホウドリの撲殺事業での利益で玉置は実業家の地位を築いていたのである。

さらに玉置は，1897（明治30）年に農商務大臣の榎本武揚によって帝国議会に提案された「遠洋漁業奨励法」による奨励金も受領している（農商務省水産局1918:25-26）。遠洋漁業奨励法とは，日本近海に出没する外国漁船に対抗するため，わが国の遠洋漁業の育成，発展を意図した法律で1934（大正3）年まで多額の奨励事業が続けられた（二野瓶1981）。2年目の1898年度には，合計14隻に奨励金額1万6,240円が公付されたが，このうち2隻は玉置の所有船で，全奨励金額の2割弱の2,943円がフカ漁業への奨励ということで玉置に交付されていた[25]。

玉置はこの奨励金を得て，東はミッドウェーなど北西ハワイ諸島から，西は東シナ海など太平洋の至る所で，フカ漁業という名目のもとでアホウドリなどの鳥類の捕獲や無人島の探索を行った[26]（玉置1925）。前述した政治的なつながりで得た情報を活用し，玉置は事業を拡大していったのであり，さらに1900（明治33）年の大東島の開拓につながることになった（平岡編2005）。

Ⅲ　南洋ブームと無人島探検

1. 海洋小説と無人島開拓

明治初期，国力の充実が図られるにつれ対外膨張論が高まりをみせ，南進か北進かの二つの進出論のうち，1880年代から90年代にかけて南進論が急速に台頭した（矢野1979）。北進は，超大国ロシアが大きく立ちはだかるのに対し，南進は四面環海という国土の地理的条件もあり，広い太平洋には展開の余地があると見たのである。

1884（明治17）年にはマーシャル諸島での日本人漂流民殺害事件，翌85年にはイギリス軍の朝鮮・巨文島占領，87年にはシンガポール沖での最新鋭艦「畝傍」の謎の沈没事件などが新聞紙面を賑わし，同年，天皇による海防整備の勅令が出るに至っては，国民の関心は，いやがおうなく海へ向かった。加えて海軍は，1877（明治10）年前後から軍艦を太平洋地域の遠洋航海に派遣し，1886年にも南洋群島，オーストラリアなどへの10ヵ月に及ぶ遠洋航海に軍艦「筑波」を巡航させたが，この航海に参加した志賀重昂は，航海での見聞をまとめた『南洋時事』（1887年）を出版し，一躍，注目された。以後，服部 徹『日本之南洋』（1888年），鈴木経勲『南洋探検実記』（1892年）など南洋に関する書物が続々と刊行された。

これらの書物の刊行は，イデオロギーとしての南進論に大きな影響を与えたことは明らかであるが，ここでは，さらに大きな影響力を持った新聞に注目した。庶民にとってより入手が容易な情報媒体といえる新聞，とりわけ挿絵入りで平仮名を多用した新聞の連載小説が，庶民の広範な支持を得ていた。この時期，新聞小説は社会問題も題材とするようになり，自由民権運動をバックアップする政治小説にも成長し（紀田1965），南進論の高揚と時を同じくして海洋（南洋）小説が登場する。1887（明治20）年7月から9月にかけて須

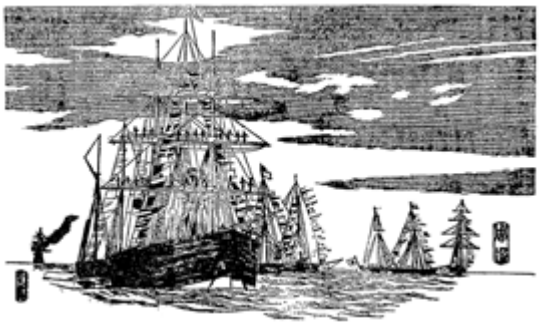

図4　小宮山天香『冒険企業 連島大王』の挿絵
（『明治文学全集6　明治政治小説集（2）』筑摩書房，438頁）

藤南翠の『朝日の旗風[27]』が，続いて小宮山天香『冒険企業 連島大王[28]』（図4）が11月から翌88年3月にかけて改新新聞に連載された。いずれも南洋の無人島を発見，開拓し日本の領土にする，あるいは島の王様になるという南進的なユートピア物語である。また，同年に刊行された久松義典の『南溟偉蹟』も最新鋭艦の沈没から奇跡的に島に漂着した軍人が島の王になるという，これまた同様の南進小説と言える。この傾向は1890年の矢野龍渓『浮城物語』，翌91年の末広鉄腸『南洋の大波瀾』などへと続くが，内容的には南進の拡大と武力進出という色彩が強くなる（判沢編1970:205）。

以上のように海洋小説の出現当初は，無人島探検から開拓，あるいは貿易に主眼が置かれ，このことからして小説の主人公は，まさに同時期に無人島の鳥島を開拓し，外国との貿易で巨額の利益をあげた玉置半右衛門と重なるのである。あるいは玉置は，新聞小説のユートピアを実現した実在の人物ともいえる。現に玉置は鳥島では「大将」と呼ばれ，後に開拓した大東島は「玉置王国」と称された。

鳥島での置き去り事件から，わずかに2，3年で玉置は著名な実業家となり，1892（明治25）年から93年にかけて刊行された『実業家百傑伝』（坪谷1893）には，日本を代表する実業家の1人として取り上げられ，翌94年の読売新聞は，玉置を「南洋事業の模範家」と報じた[29]。これ以降も『実業人傑伝』（広田1898），『立志百話』（椋木編1900），『最近実業界の成功者』（鈴木編1908）など多くの書物に取り上げられ，一躍，時の人となった。さらに横山源之助は『明治富豪史』（1910）の中で，富豪になる方法の一つとして無人島探検をあげており，かなりの頁を割いて玉置やアホウドリについて記述している。このような刺激を受け，一攫千金をもくろむ人々は，アホウドリを求めて南洋へ無人島探検に奔走することになる。

2.　北太平洋の認識と無人島探検

アホウドリの羽毛が膨大な利益になることを認識した人々は，無人島の発見に血眼になった。1891（明治24）年5月30日付の読売新聞は「南洋に豊土ありとは，近頃の流行語にて…（傍点筆者）」と南洋ブームを示唆し「小笠原島より東南三百英里の洋中に一大島あり，全積小笠原島に比して，稍や広大なる無人島にして何れの国にも属せず…」（図5）とし，グランパス島と呼ばれるこの無人島へ向けて小笠原を出港した探検船の動向を報じた。

この無人島探検はブームのように広がり，多くの日本人が南の島々へと向かったが，彼らはどのようにこの海を認識していたのか，以下，地図に現れた北太平洋について検討する。

図6は1816（文化13）年に刊行の航海上の技術を簡単にまとめた「海路安心録」の付図「日本囲堯諸島配当之図[30]」である。メルカトル図法の航海図であるが，夏至線（北回帰線）付近から北にかけて実在しない島，疑存島[31]が多数描かれている。また図7は，江戸時代を代表する世界図「新訂 万国全図」（1810年）を大学南校が修正した「重訂 万国全図[32]」（1871年）である。こ

○グランパス島の探檢者
南洋に寶土ありとゝ近頃の流行語にて昨年其の一端と巡廻しゐる田口卯吉氏の如きも大に其の盛況と說かれしが這ゝ重に獨逸、西班牙領に屬して專ら貿易に適そる部分にて未だ殖產興業に便利の土地あると聞かざりし然るに近頃說くものあり小笠原島より東南三百英里の洋中に一大島あり全體小笠原島に比して稍や廣大なる無人島にして何れの國にも屬せず偶鯨獵船の漂着して海岸數歩の地と踏むに過ぎざれど土地の肥瘠ゝ罩ぼ察そると得べし四岸茫漠たる砂原にゝ大鼈群遊してさながら大地の動ぐかと怪しまれ聳爾たる山々の根にゝ鬱蒼たる麵包樹天然の食と給して恰も鹿臺の半邊と見るに異らず溪澗の冷泉ゝ清て飲むべく潮

図5　読売新聞 1891 年 5 月 30 日付
「グランパス島の探検者」

図6 「海路安心録」の付図「日本囲堯諸島配当之図」
1816（文化 13 年）（神戸市立博物館所蔵）

の図にも伊豆諸島，無人諸島（小笠原諸島）の東の太平洋上には，多くの存在しない島々が描かれている。このほか「地球万国方図」（1853 年），「興地航海図」（1858 年）などにも同様に多くの疑存島の記載があり，1887（明治 20）年刊行の「新訂 万国興地全図」にも，いびつな形の存在しない島々がハワイ諸島との間に描かれている。

このような疑存島の記載は，この時代の日本製地図の典拠がヨーロッパ製地図にあったためである。たとえば図 8 のラインハルトの「アジア図[33]」（1805 年）のように，多くのヨーロッパ製地図には，太平洋上に多数の存在しない島々が描かれている。また，この図には日本人の無人島探検の対象となったグランパス島も記載されている。さらに 1850 年代に刊行されたジョン・タリスの世界地図（マーティン 1992）のポリネシア（太平洋の島々）にも多くの疑存島が記載されている。

このように明治前期までの日本人の北太平洋の地理的知識は，地図で見る限り，日本から，そう遠くない北太平洋上に多くの島々が存在すると認識していたとして差し支えないであろう。これらの島々は，南洋で一攫千金を夢見る人々にとって宝の島に見えたと考える。すなわち鳥島で無数といえるほどのアホウドリがいるならば，これらの島々にはもっといるはずであるという思惑が，当然働いたものとみる。

なかでも小笠原諸島に比較的近い，前述のグランパス島は，『南洋群島獨案内』（ハインドレー，A.G 1888: 24-25）にも発見者や位置の記載がある。また，『南島巡航記』には，「位置は北緯二十五度十五分，東経百四十六度四十分と云ふ…（中略）…未だ確乎たる位置定らず，是迄，同島を発見せんとて其近海を尋ねしものあれとも孰れも其目的を達せずして帰りたり…」（井上・鈴木 1893:239）とあり，1890（明治 23）年に田口卯吉が南洋貿易に従事し，その帰路にこの島を熱心に探したが発見できなかったという。このようにグランパス島は，その存在が不明のまま多くの人々によって探検が行われていた（近藤 1926）。

このうちの 1 人で，小笠原を拠点に南洋貿易を行っていた水谷新六も同島への探検を繰り返していたが，島を発見しないまま 1896（明治 29）年

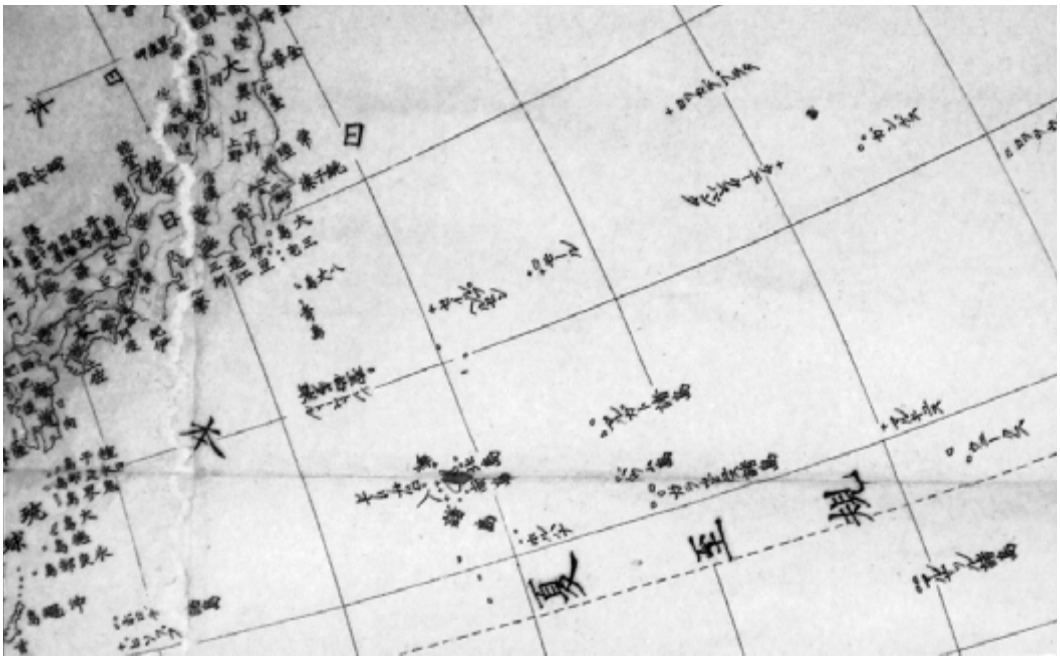

図 7 「重訂 万国全図」大学南校 1871(明治 4)年（神戸市立博物館所蔵）
図の右上に「ガンゲス」島の記載がある.

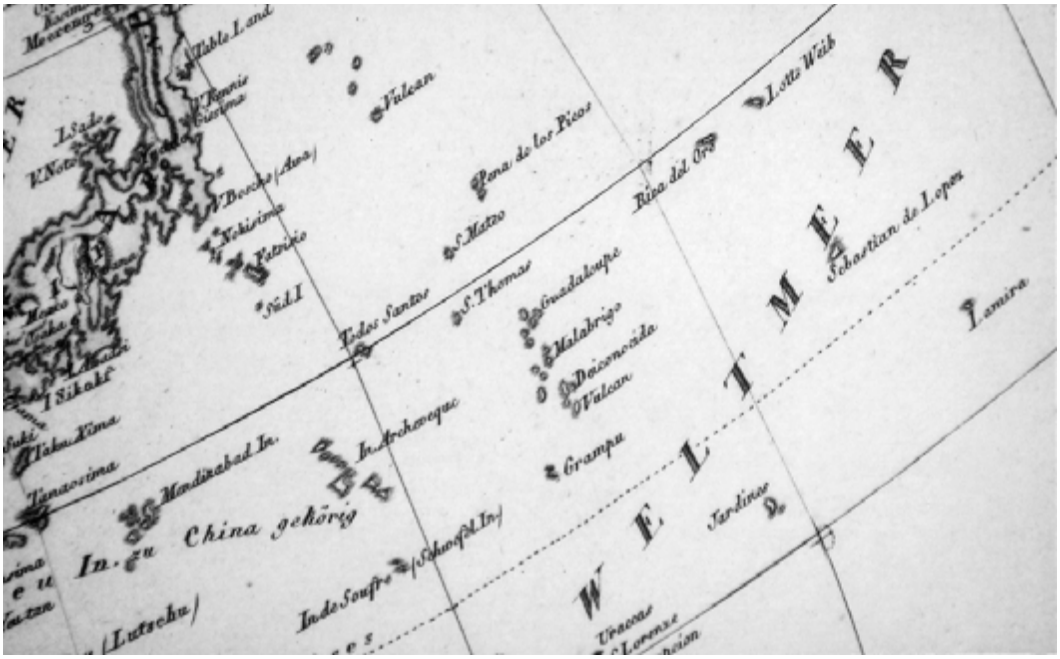

図 8 「アジア図」ラインハルト 1805 年（神戸市立博物館所蔵）
図の中央，やや下に「Grampu」島の記載がある.

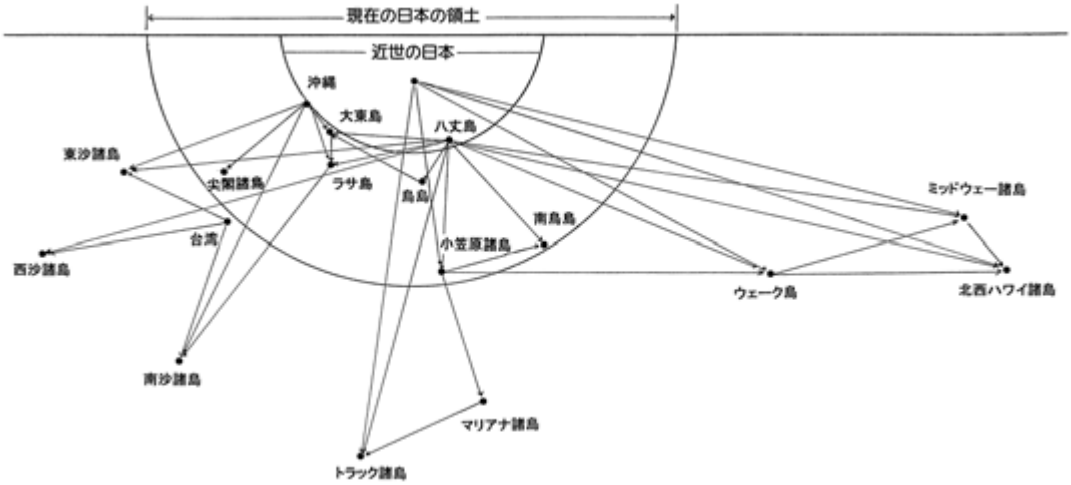

図 9　日本人がアホウドリなどの鳥類・鳥糞(グアノ)を求めて進出した島々

12 月，広大な島とうわさされたグランパス島とは全く異なる小さな島（マーカス島）を偶然発見した。上陸してみるとアホウドリなどの鳥類が多く，水谷はすぐに小笠原から労働者を導入して，その捕獲を始めるとともに同島を日本に編入すべきと「島嶼発見届」を政府に提出した。政府は 1898（明治 31）年になって，この島を「南鳥島」と命名し日本の領土に編入した。現在の日本最東端になるわけで，グランパス島は存在しなかったものの日本の領域は東に大きく拡大することになった（平岡 2003）。

このようにアホウドリを行為目的として，明治 20 年代から 30 年代にかけて多くの日本人が無人島進出を試みる，いわゆる南洋ブームによって日本の領域の拡大化が図られた（図 9）。琉球列島の西，尖閣諸島では 1887（明治 20）年頃からアホウドリやヤコウ貝を求めて日本人が進出，政府は 1895（明治 28）年になって，ようやく日本領土に編入した（平岡 2005）。大東諸島のうち南北大東島は早くから存在が知られ，1885（明治 18）年に日本に編入したが，断崖絶壁の地形のため開拓が行われず無人島のままであったものを，鳥島でのアホウドリの減少に危機感を持った玉置半右衛門が，1900（明治 33）年にこの南大東島に進出した（平岡編 2005）。沖大東島（ラサ島）は，前述の水谷新六が 1898（明治 31）年にアホウドリを求めて探検を行い，翌 99 年には中村十作[35]が渡航し，政府は 1900（明治 33）年になって日本に編入した（平岡 1992）。

Ⅳ　疑存島の発見から領有へ

1. ガンジス島の発見から中ノ鳥島へ

明治中期の南洋ブームで，グランパス島と並んで無人島探検の対象になった疑存島にガンジス島があった。世間のグランパス島への熱が冷めるなかで，ガンジス島が話題を集めつつあった。1894（明治 27）年 3 月の東京地学協会の例会において，小笠原島庁島司の北澤正誠は，「小笠原島近状」という報告の中で「グランパスヲ去ルコト九百浬ノ所ニガンジス島ト云フ島ガアル，此所ニハ信天翁ト云フ鳥ガ澤山居ル，其島ハ小笠原島ト較ベテ見レバ二倍モ三倍モ小笠原島ヨリ大キイト云フコトデアリマス…（傍点筆者）」（北澤 1984）と島について具体的なことを言及しつつ，確認したわけで

はないと述べた。

だが，このガンジス島については，すでに1830年代のヨーロッパ製地図に描かれている。また，日本図でも1855（安政2）年の山路諧考の『重訂 万国全図』に「ガンゲス」の記載があり，さらに修正を加えた図7にも描かれている。また，水路誌では，1900年のイギリス海軍水路部『太平洋諸島水路誌[36)]』に，ガンジス島は北緯30度47分，東経154度15分にあるという報告もあるが，正確な位置については確実なものがないと記載し，『日本水路誌』にも小笠原の人々が「数回之ノ探検ニ従事シタルモ遂ニ之ヲ認メタルコトナシト云ヘリ，海図上ニハP．D符ヲ置クト雖モ其実有無未定ナルカ如シ…」（水路部1892:344）とした。また，玉置半右衛門らもガンジス島の探索を行ったが発見できなかったという（岡1909:243）。

存在が不明のガンジス島が話題になってから十数年後の1908（明治41）年，ついに発見された[37)]。発見者は山田禎三郎で，4月28日に「小笠原島所属島嶼発見届」に地図（図10）をつけて小笠原島庁に提出したのである[38)]。それによると，前年の1907年8月に北緯30度5分，東経154度2分において島を発見したという。小笠原島庁に発見した島の概況を以下のように報告した。

一　該島ハ小笠原島ヲ距ル五百六十浬ニシテ全島一里二十五町ナリ

二　島内全面積六十四万三千七百坪

三　地積八分通迄 燐鉱堆積シ，其厚サハ平均六尺位ニシテ之ニ含有セリ燐酸石灰ハ二十パーセント乃至二十五パーセントナリ

四　樹木ハ タコノ樹 一坪平均一本位アリ，稀ニカヤ樹ヲ見ル，飲料水ノ自然ニ湧出スルモノナシ

五　鳥類ハ馬鹿鳥（白黒），一見数百万羽ヲ算ス

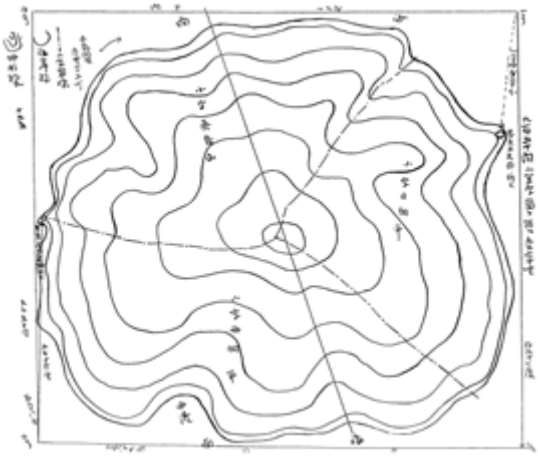

図10　山田禎三郎が提出したガンジス島の地図

六　該島ハ海図ニ於ケルガンジスアイランド（GANGES.I）ニ相当スト思惟ス

七　探検ノ上別図面ノ如ク，島内ヲ三分シ仮ニ小字 日向平，真鳥山及西向平ト命名セリ，船着場所ハ西向平ニシテ西港ト仮称セリ

（傍点筆者）

ガンジス島の発見届を受けた小笠原島庁は，東京府へ上申し，東京府は同年5月4日，内務大臣原 敬に宛てて島の行政上の所属についての詮議を求めた。これを受けて新聞各紙は，こぞって新島発見を取り上げ，特に国民新聞は地図を入れて報道した[39)]。続く5月13日，内務省は，この新島について海軍水路部に調査を依頼したが，水路部は新島に関する十分な資料はないが，その位置からガンジス島と推定されると回答した。山田が東京鉱山監督署に燐鉱採掘を出願し，また，捕鳥についても全島を借用，捕鳥の許可を小笠原島庁に出願しているのを受けて，東京府知事は内務大臣に，至急，新島の行政区を決定するようにと上申した。

7月1日なって内務大臣の原 敬は，総理大臣の西園寺公望に「無人島名称並所属ニ関スル件」として，新島の位置は水路誌記載のガンジス島の位

置とは少し違うけれども「帝国ノ版図ニ属スベキハ論ヲナキヲ以テ該島ヲ中ノ鳥島ト名ケ，東京府小笠原島庁ノ所管ト為サントス…（傍点筆者）」として閣議に諮るよう要請した。同17日，法政局長官は「…同島ニ於テ燐鉱採掘，捕鳥事業ヲ営マントスルモノナルニ於テハ，之ヲ以テ国際法上占領ノ事実ト認メ該島ヲ本邦所属トシ可然…」とした。7月22日に閣議決定され，ガンジス島は「中ノ鳥島」と名称を変えて「帝国」日本の領土に組み入れられた[40]。

2. 志賀重昂と幻の中ノ鳥島開拓

日本の領土に編入されたガンジス島（中ノ鳥島）であるが，その後，山田禎三郎が出願した燐鉱採掘は東京鉱山監督署から試掘が認められたものの，その事業化や捕鳥事業の消息は不明のまま忘れられていた。しかし5年後の1913（大正2）年になって中ノ鳥島開拓が計画され，11月15日に吉岡丸という帆船が乗員26名を乗せて東京を出港したと新聞各紙が一斉に報道した[41]。見送り人は数千人とも言われた（横山1914）。志賀重昂は，同船の甲板で目的の島は高さ10ｍ程度のサンゴ礁で水の入手方法，栽培すべき野菜，生活の仕方などの訓話を乗員に対して行った（志賀1928:420-422）。また，前日には東京朝日新聞が訓話と同じような志賀の談話「無人島開拓及び移住の方法」を掲載した[42]。これらはどちらも志賀自身が，中ノ鳥島をまるで見て来たかのような内容であった。

出港後，吉岡丸は八丈島近海で暴風に遭遇したが，どうにか小笠原諸島の父島に着き，それから中ノ鳥島へ向かった。12月14日頃にその海域に到着し，「…経緯一百浬以内を隈無く乗り廻し，延長二千十四浬，二十七日間捜索せる[43]…」が島を発見することができず，出発より4ヵ月半後の1914（大正3）年3月30日，東京へ帰港したのであった。

この吉岡丸の帰港について，志賀の談話が4月3日の東京朝日新聞に掲載された。志賀は，出港前に島の存在を明言していたにもかかわらず意味不明の弁解を繰り返し，最後には開き直りのような「全然影も形も無い有名無実の島なる事が，今度の探検で分明した」ことは，学術上の効果があったと無責任きわまりない言説に終始した。

政府は，存在しない架空の島を中ノ鳥島と命名し領土に組み入れたことになったといえる。これは山田の提出した発見届をそのまま鵜呑みにしたことによるが，この発見届を吟味すると記載事項が矛盾だらけであることがわかる。まず，山田の言う発見した島の位置，北緯30度5分，東経154度2分には「小笠原島ヲ距ル五百浬」では到達せず，島は100海里以上東方にあることになる。また，「全島一里二十五町」で「島内全面積六十四万三千七百坪」と島の面積の記載があるが，島の周囲1里25町すなわち約6,543ｍの島では，斜面を全く計算に入れず平らな島と仮定しても，その面積は約103万坪となる。斜面を計算に入れれば面積は，さらに広大となり，記載の64万3,700坪と矛盾していることは明らかである。また，「地積ハ八分通迄 燐鉱堆積シ其厚サハ平均6尺位」で「含有セリ燐酸石灰ハ二十パーセント…」というのも，島を詳細に調査しないと分かるものではなく信憑性に欠けるといえる。さらに「馬鹿鳥（白黒）数百万羽ヲ算ス」とあるが，これは長谷川も指摘しているように，アホウドリは初冬に来島する鳥なので8月に島を発見した山田が鳥の数を計算できるわけがない（長谷川2004:140）。なお，発見届に付けられた地図（図10）には，ガンジス島は御椀を伏せたような形に描かれ，3つの小字として真鳥山，日向平，西向平が記入されているが，「山」や平坦な土地を意味する「平」に当たる地形が，ともに地図上では全く表現されてお

らず，きわめて不自然な地図と言える。

以上のような疑わしい発見届を受理し，「帝国」日本の領土にガンジス島を編入した政府は，これ以降，中ノ鳥島と命名したこの島を領有し続けることになった[44]。

その後，領有した中ノ鳥島（ガンジス島）の探検・調査は数回行われたが，いずれも発見できなかった。1927（昭和2）年9月には，海軍測量艦「満州」が10日間にわたって調査を行ったが島の存在は確認できず，東京朝日新聞は「影も形もない 二つの孤島」として報道した[45]。また，1932（昭和7）年にイギリス海軍の将校が勤務地である香港から，帆船で太平洋を東に横断してイギリスに帰国するため，日本政府に横浜などへの寄港の許可を求めたことがあった。その旅程表には，香港－横浜－ガンジス島－ホノルル…と記載されていた。海軍は，ガンジス島の存在は疑わしいとしながらも完全にその存在を否定できず，万一，イギリス軍人に発見されると面倒なことになるので，この帆船の寄港に難色を示し，翌1933年4月に海軍軍務局長は，外務省欧米局長に国防上好ましくないと通牒した[46]。存在しない中ノ鳥島（ガンジス島）は，依然として「帝国」日本の領土であった。わが国の領域から中ノ鳥島が消えるのは，第二次世界大戦後，発見から38年後の1946年のことである[47]。

3. 幻の島の借地・開拓願い―権利獲得競争の果て

ガンジス島の発見届が出されてから2年後の1910（明治43）年7月に，玉置半右衛門は，自らが経営する南北大東島の南にある沖大東（ラサ）島から，さらに南へ260カイリにあるという無人島「アベジョー島拝借願[48]」を沖縄県に提出した。具体的な開拓の目的，方法などの言及もなく，ただ，同島を開拓・経営するとし，30ヵ年間の借地を願うものであった。翌年，玉置の妻，寿美から拝借願いに記載のアベジョー島というのは，アブレジョー島のことであるとの修正の申告があるが，同島（Abreojes I.）は，1800年代のヨーロッパ製地図に，時折，記載されている琉球諸島の南東海上の疑存島である（秋岡1938:102）。願書には，1905年のイギリス水路部の告示やアメリカ水路部刊行のアジア水路誌などを参照し，北緯23度8分，東経129度26分にあることが確実であるとした。

玉置の提出から3ヵ月遅れて，10月25日には安田義寛・小林門平も同島の「官有地予約開墾払下願[49]」を内務省に提出した。その願書によれば島の面積は180町歩，予想払い下げ代金は100円，開拓期間10ヵ年で目的は農業と記載されていた。島の所在も疑わしい島であるが，出願者は10年前より調査しており，開墾の望みがあることを確認していたという。翌1911年（明治44）5月には，玉置寿美が「アベジョー島拝借ノ義出願候ニ付追伸書」を提出，同島へ探検船を派遣したので，近く位置と島の状況を報告するとした。

以上の二つの出願を受けた内務省は，9月2日「アブレジョス島開墾払下の義」については「帝国ノ領土ト認定シ差支無之義ト存候ヘトモ[50]…」としながら，外務省の意見も伺いたいとして同省へ照会した。この後，外務省が，どのように対応したかは不明であるが，同島を日本に編入した事実はない。この島もガンジス島と同様，存在しない架空の疑存島であった。2件の出願は幻の島への借地・開拓願いであったのである。

このような存在しない島への借地・開拓願いが提出された背景であるが，アホウドリなど鳥類捕獲は一事業（川崎・丸芳編1913）として莫大な富をもたらすため，争って疑存島探検が行われたが，多くの場合，競争相手が存在した。沖大東島（ラサ島）では，借地権をめぐり4～5人の熾烈な争

いが展開され，行政訴訟まで行われたという。その中の1人だった玉置は，この島の権利争いからの撤退により20万円を得たという（玉置1925）。一攫千金を狙った人々にとって，島が存在するかどうかよりも，島の利用や借地権が入手できるかが鍵であり，何はさておき願書を政府に提出することで「先願」を得ることを狙ったと思われ，この時代，数多くの存在しない島の発見，借用，払い下げ願いが政府に提出された。この幻の島への願書提出は，まさに権利獲得競争の果てということができる。

V　あとがき

本稿は，明治以降の日本人による無人島探検から「帝国」日本の領土拡大について，行為論の視点から，アホウドリなどの鳥類捕獲を行為目的として人々が南洋に進出したと想定し検討したものである。

その結果，アホウドリは小笠原諸島において，明治初期から捕獲され，明治10年代後半には羽毛の外国への輸出も認識されていたこと，また，鳥島では1888（明治21）年から玉置半右衛門が大規模なアホウドリ撲殺事業を開始，数年のうちに巨利を得て実業界で成功者となり，榎本武揚や志賀重昂をはじめ，多くの南進論者と深くかかわっていったこと，さらに当時の新聞小説において，無人島を開拓するという冒険的な海洋小説が広く読まれ，これを実現した玉置は様々な書物や雑誌に取り上げられ，無人島探検（南洋）ブームの一因となったことなどを指摘した。加えて，当時の地図や水路誌には，数多くの疑存島が記載されており，アホウドリなど鳥類捕獲が莫大な利益をもたらすと認識した人々は，競って疑存島の探検に乗り出し，結果的に南鳥島の発見・領有につながったこと，さらにこのようなブームの中で，明治政府が存在しないガンジス島を中ノ鳥島として領有した件は，疑存島の「先願」あるいは「先占」が島の権利を生じさせることから，すさまじい権利獲得競争の一面を見せた事件だったということにも言及した。

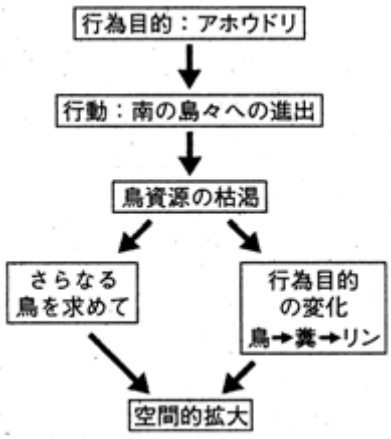

図11　南の島々への日本人の進出

その後，アホウドリなど鳥類を追った人々の行動は，行為目的である鳥類の減少によって，さらなる島々（生息地）を求めざるを得ないか，あるいは行為目的を鳥糞（グアノ）・燐鉱へと変化させつつ（図11），空間的に拡大して行った。このような一攫千金を目論む山師的な人々の行動が，「帝国」日本の領域を東へ，南へと拡大したことを明らかにした。

神戸市立博物館の三好唯義，小野田一幸の両氏には，絵図の熟覧に当たって御助力いただき記して感謝を申し上げたい。

注

1）マックス･ウェーバーの主張した「社会的行為の意味的解明」は，人間の行為の動機を理解することによって，様々な社会の因果関係を説明する方法（行為論）である（ウェーバー，M．阿閉･内藤訳1987:125）。この行為論は，地域を扱う地理学研究において，なぜか関心が払われてこなかったが，筆者は行為論的な問題把握は地理的状況を解釈するうえで極めて有効であり，動機を含め，なぜというアプ

ローチは地理学研究にとって必須のものと考える。

2） 馬鹿鳥（バカ鳥），信天翁（舜天翁），藤九郎，シラブ，沖の太夫などと呼ばれる翼長2mに及ぶ大型の海鳥。無人島に季節的に生息し，人を恐れないこと，さらに飛び立つのに滑走が必要なことから，撲殺によって簡単に捕獲され，その羽毛や羽はヨーロッパ，特にフランスに輸出され高値で売却された。

3） 平岡（2006，2007，2008）や Culliney（1988）の北西ハワイ諸島での日本人の鳥類密漁事件についての報告，野村（1987）の南洋群島でのネッタイチョウを追った日本人についての記述がある。

4）『農務顛末 第6巻』424-433頁に詳しい。

5）『農務顛末 第1巻』852-873頁に詳しい。

6） そのうちの一人，安井万吉は父島から母島に移り，サトウキビ栽培を通じて実業家となり，1891年の軍艦「比叡」による遠洋航海に三宅や依岡などとともに乗船した。

7） 松沢求作の「八丈島日記」（中島ほか1976）に玉置半右衛門の名前が登場する。

8） 神戸市立博物館所蔵　秋岡武次郎コレクション。

9） 神戸市立博物館所蔵　秋岡武次郎コレクション。

10） 神戸市立博物館所蔵　南波松太郎コレクション。

11） 東京都公文書館所蔵 東京府市文書『明治15年回議録』。

12） 東京都公文書館所蔵 東京府市文書『明治20年-22年回議録』。

13） 東京都公文書館所蔵 東京府市文書『明治21年稟申録』。

14） 望月は開拓目的を，この願書などから牧畜としているが，すでに小笠原諸島でアホウドリが捕獲されていること，また，玉置の鳥島上陸での行動などから，開拓当初よりアホウドリの捕獲が目的であったことは明らかである。

15） 明治前期に南進論を主張し，1888年に訳書『南洋群島獨案内』を出版，1891年には貿易会社「日本恒信社」を設立し南洋貿易を行った。

16） 明治期に活躍した南洋探検家。1892年『南洋探検実記』，翌93年『南島巡航記』などを刊行したが，その冒険的航海は虚構であったとする説もある（高山1995）。

17） 玉置，松岡は鳥島滞在10日間でアホウドリの翼や卵（40箱）を採集，明治丸に積み込むつもりだった。

18） 毎日新聞1887年11月27日付，東京日日新聞12月7日付など。

19） 東京都公文書館所蔵 東京府市文書『明治21年稟申録』。

20） 服部（1889）によれば，アホウドリが群をなし「近く眺むれば一大養鵞場に至るが如し，欧米都会の家禽場と雖ども何ぞ斯の如く壮大なるものあらんや…」とその数に驚いており，捕獲は撲殺によって簡単に「一人一日百羽二百羽を殺すとは至難にあらず…」と報告している。1888年の半年間に10万羽が捕獲され，以降，年に30万羽が撲殺されたと推定される。

21） 東京府告示第80号「本府管下鳥島ハ自今小笠原島島庁所属ニ属セラル」。

22） 志賀の郷里，岡崎市東公園に移設された志賀の別宅（南北亭）の柱に，南大東島のビロー樹が使用されていることからも，その親密度がわかる（宇井邦夫1991:23）。

23） 1924年に南大東島の玉置公園に建立された玉置翁記念碑。

24） この遠洋航海の途中，オーストラリアのシドニーで下船し，単身木曜島に渡った。その後，香港で宮崎滔天らの中国革命運動を支援した。

25） 遠洋漁業奨励事業の対象の漁業の種類と海域は，勅令によって規定されることになっていた。実績を見ると，鯨，ラッコ･オットセイ猟，フカ，タラ，サバ，イカ，マグロなど種類も多く，また，海域もシナ海，黄海，オホーツク海，太平洋など広範囲であった。このうちフカ漁業と申請するのが，もっとも広範囲な行動が可能で，アホウドリなどの鳥類捕獲に都合が良かったと考える。実際，フカ漁業も試験的に行ったケースもある。

26） 玉置ばかりでなく，遠洋漁業奨励事業で奨励金を得た多くの漁船は，太平洋の島々でアホウドリなどの鳥類捕獲に従事した。

27） 1889年にタイトルを『旭日旗』と変えて単行本で刊行された。

28） 文献（柳田編1967）に収録されている。

29） 読売新聞1894年8月31日付。

30） 神戸市立博物館所蔵　秋岡武次郎コレクション。

31） 疑存島あるいは疑島と呼ばれ，地図や海図に記載されているものの存在が疑わしい島のことである。戦前の海図では，P.D（Position Doubtful），あるいは E.D（Existence Doubtful）と付記されている場合もある。

32） 神戸市立博物館所蔵　南波松太郎コレクション。

33） 神戸市立博物館所蔵　秋岡武次郎コレクション。

34）「商工世界太平洋」9巻4号（1910年2月）「無人島発見成功者 水谷新六君の半生」。

35） 新潟県に生まれ，奄美大島でヤコウガイの採取，宮古島で真珠養殖の事業を興す。宮古島滞在中に過酷な人頭税を知り，その廃止運動にかかわり国会に請願などを行い人頭税を廃止させた。

36） 外務省外交資料館所蔵『公文備考－帝国版図関係

雑件』。

37） 長谷川は文献（2004）だけでなく，この経緯について http://homepage3.nifty.com/boumurou/ で詳しく解説している。

38） 国立公文書所蔵『公文類聚 32 編』。

39） 国民新聞 1908 年 5 月 6 日付。

40） 前掲 36）。

41） 読売新聞 1913 年 11 月 15 日付，東京朝日新聞，時事新報，国民新聞 11 月 16 日付など。

42） 東京朝日新聞 1913 年 11 月 14 日付。

43） 東京朝日新聞 1914 年 4 月 3 日付。

44） 第二次世界大戦以前に発行の書物には，中ノ鳥島の記述や島名が記入されている地図もある。

45） 1927 年 9 月 22 日付東京朝日新聞が二つの孤島としているのは，ガンジス島と中ノ鳥島は違う島かも知れないという見方があったためであり，二つとも存在しないことを確認している。

46） 防衛省防衛研究所図書館所蔵『海軍省公文備考』。

47） 1946 年 11 月 22 日付水路部告示第 46 号。なお，倉品（1996）は，中ノ鳥島が存在せず，戦後になって海図から消されたことについて，島が海底火山の爆発で海面下に沈んだか，あるいは当時の測量技術から島を誤認したとの二つの説をあげており，最初から発見届が捏造されたものとは全く考えていない。

48） 外務省外交史料館所蔵 外交文書 3-12-1-18。

49） 前掲 46）。

50） 前掲 33）。

文　献

青柳幸治（1981）：『青柳徳太郎交易日記』私家版.

秋岡武次郎（1938）：太平洋上の邦領島嶼．地理学，**6**，102-110.

磯村貞吉（1888）：『小笠原島要覧』便益社，国立国会図書館所蔵.

井上育次郎・鈴木経勲（1893）：『南島巡航記』経済雑誌社.

井伏鱒二（1964）：『ジョン萬次郎漂流記』（井伏鱒二全集 第 2 巻）筑摩書房，67-144 に所収）.

入江寅次（1942）：『邦人海外発展史（下）』（復刊 1981，原書房）.

入江寅次（1943）：『明治南進史稿』井田書店.

宇井邦夫（1991）：『志賀重昂 人と足跡』現代ファルム.

ウェーバー，M. 著，阿閉義男・内藤莞爾（1987）：『社会学の基礎概念』恒星社厚生閣. Weber, M.（1921）：*Soziologische Grundbegriffe*.

羽毛文化史研究会（1993）：『羽毛と寝具のはなし－その歴史と文化』日本経済評論社.

大槻文彦（1875）：『小笠原島新誌』須原屋伊八，国立国会図書館所蔵.

小笠原島庁（1888）：『小笠原島誌纂』小笠原島庁所蔵.

岡　成志（1936）：『依岡省三伝』日沙商会.

岡　雷平（1909）：『南洋群島 珊瑚島探検記』博文館.

奥山育子（1986）：八丈島における人口流出過程とその特質－主に明治初期から第二次大戦まで－．地学雑誌，**95**，46-61.

片倉信光（1942）：南方開拓の先駆者 横尾東作について，仙台郷土史研究，**12**，9-13.

加茂義一（1960）：『榎本武揚』中央公論社.

川崎良三・丸芳葆編（1913）：『太平洋の宝庫 独領南洋諸島』南洋同志会.

河東田経清（1917）：『横尾東作翁伝』私家版.

北澤正誠（1894）：小笠原島近状，東京地学協会報告，**15**，399-452.

紀田順一郎（1965）：『明治の理想』三一書房.

倉品昭二（1996）：幻の島「中ノ鳥島」甦った島「沖ノ鳥島」．地図情報，**15**，13-16.

倉田洋二（1983）：『写真帳 小笠原－発見から戦前まで』アボック社.

児玉正昭（1987）：『殖民協会報告　解説・総目次・索引』不二出版.

小宮山天香（1887）：『冒険企業　連島大王』（『明治政治小説集(2)』1967，筑摩書房，322 - 441）.

近藤正太郎（1926）：『南島余芳－続』私家版.

今野敏彦・藤崎康夫編（1985）：『移民史Ⅱ　アジア・オセアニア編』新泉社.

佐々木敏二（1989）：榎本武揚の移民奨励策とそれを支えた人脈．キリスト教社会問題研究，**37**，537-549.

志賀重昂（1889）：『南洋時事附録』（『志賀重昂全集 第 3 巻』1995 年復刊，日本図書センター，120-131）.

志賀重昂（1909）：『大役小志』東京堂.

志賀富士男（1928）：『志賀重昂全集　第 8 巻』志賀重昂全集刊行会.

清水　元（1991）：明治中期の「南進論」と「環太平洋」構想の原型（Ⅰ）－志賀重昂『南洋時事』をめぐって．アジア経済，**32(9)**，2-44.

殖民協会（1893）：殖民協会報告，**1**，106-125.

水路部（1892）：『日本水路誌　第 1 巻　第 1 改版』.

末広鉄腸（1891）：『南洋の大波瀾』春陽堂.

鈴木経勲（1892）：『南洋探検実記』博文館（復刊 1980，平凡社）.

鈴木高弘（1990）：明治前期小笠原諸島開拓の群像．東京都立小笠原高等学校研究紀要，**4**，48-126.

鈴木高弘（1991）：小笠原渡航者名簿－明治 12 年 12 月から明治 19 年 12 月．東京都立小笠原高等校研究紀要，**5**，170-187.

鈴木貞次郎編（1908）：『最近実業界の成功者』精華堂.

須藤南翠（1889）：『旭章旗』春陽堂.
高村聡史（1999）：榎本武揚の植民構想と南洋群島買収建議．国史学，**167**，87-90.
高山　純（1995）：『南海の大冒険家－その虚像と実像』三一書房.
田口　親（2000）：『田口卯吉』吉川弘文館.
竹下源之介（1943）：『横尾東作と南方先覚士－南洋資料258号』南洋経済研究所，国立国会図書館所蔵.
武田尚子（1988）：明治20年代の移民問題と地方問題－殖民協会の設立と移民保護規則制定の過程から－．社会学論考，**9**，52-56.
田中弘之校訂（1983）：『幕末小笠原島日記』緑地社.
田中弘之（1993）：江戸時代における日本人の無人島（小笠原島）に対する認識．海事史研究，**50**，30-44.
玉置　傳（1925）：『鳥島の復興』私家版.
津下　剛（1934）：明治政府と小笠原島問題．歴史と地理，**34**，183-199.
角山幸洋（1986）：『榎本武揚とメキシコ殖民移住』同文館出版.
坪谷善次郎（1893）：『実業家百傑伝』東京堂.
東京都（1972）：『東京都百年史　第2巻』東京都.
東京都（1981）：『東京市史稿 市街篇72集』東京都公文書館.
東京都（1991）：『東京市史稿 市街篇82集』東京都公文書館.
中島博昭（1974）：『鋤鍬の自由民権－松沢求策の生涯』銀河書房.
中島博昭・松沢求策顕彰会編（1976）：『自由民権家松沢求策－その論述・作品と解説』東京法令出版社.
中島博昭（1991）：松沢求策と八丈島の近代化．信濃，**43**，369-387.
二野瓶徳夫（1981）：『明治漁業開拓史』平凡社.
農商務省水産局（1918）：『遠洋漁業奨励事業成績』農商務省.
農林省（1952）：『農務顛末　第2巻』.
農林省（1958）：『農務顛末　第6巻』.
野村　進（1987）：『海の果ての祖国』時事通信社.
ハインドレー，A．G，横尾東作訳（1888）：『南洋群島獨案内』，国立国会図書館所蔵.
長谷川亮一（2004）：幻の日本領 中ノ鳥島をめぐるミステリー．中央公論，**119**，138-141.
服部　徹（1889）：鳥島信天翁の話．動物学雑誌，**1**，465-411.
服部　徹（1888）：『日本之南洋』南洋堂.
判沢　弘編（1970）：『明治の群像6　アジアへの夢』三一書房.
久松義典（1887）：『南溟偉蹟』金港堂.
平岡昭利（1992）：沖大東島（ラサ島）の領土の確定と燐鉱採掘．長崎県立大学論集，**25(3)(4)**，432-448.
平岡昭利（1998）：鳥島開拓と借地継続の経緯について－八丈島と大東島を結ぶ島の一考察－．関西大学文学部地理学教室編『地理学の諸相』大明堂，343-362.
平岡昭利（2003）：南鳥島の領有と経営－アホウドリから鳥糞・リン鉱採取へ．歴史地理学，**215**，1-14.
平岡昭利（2005）：明治期における尖閣諸島への日本人の進出と古賀辰四郎．人文地理，**57(5)**，503-518.
平岡昭利（2006）：明治期における北西ハワイ諸島への日本人の進出と主権問題．歴史地理学，**231**，19-29.
平岡昭利（2007）：北西ハワイ諸島における1904年前後の鳥類密猟事件－バード・ラッシュの一コマ．『下関市立大学創立50周年記念論文集』139-147.
平岡昭利（2008）：明治末期 北西ハワイ諸島における日本人による鳥類密猟事件－バードラッシュの一コマ．下関市立大学論集，**51(1)(2)(3)**，71-77.
平岡昭利編（2005）：『離島研究Ⅱ』海青社.
広田三郎（1898）：『実業人傑伝』金港堂.
藤澤　格（1967）：『アホウドリ』刀江書院.
古舘　豊（1979）：「殖民協会」設立に関する一考察．史報，**1**，37-43.
本庄栄治郎（1942）：『先覚者の南方経営』日本放送協会.
マーティン，M．著，井上 健監訳（1992）：『ジョン タリスの世界地図－19世紀の世界』同朋社出版.
三宅雪嶺（1982）：『日本人の自伝5』平凡社.
宮本常一・原口虎雄・比嘉春潮編（1968）：『日本庶民生活史料集成　第1巻－探検・紀行・地誌（南島篇）』三一書房.
椋木蓮花編（1900）：『立志百話』日吉堂.
明治丸史編集部会（1982）：『明治丸』東京商船大学.
望月雅彦（1992）：玉置半右衛門と鳥島開拓－明治期邦人の南洋進出の視点から－．南島史学，**40**，41-59.
柳田　泉編（1967）：『明治文学全集6　明治政治小説集（2）』筑摩書房.
矢野　暢（1979）：『日本の南洋史観』中央公論社.
矢野龍渓（1890）：『浮城物語』報知社.
山田毅一（1916）：『南進策と小笠原群島』放天義塾出版会.
山室　信編（2006）：『「帝国」日本の学知　第8巻』平凡社.
横山源之助（1910）：『明治富豪史』易風社.
横山源之助（1914）：明治大正年間に於ける無人島探検史．新評論，1月号，49-55.
Culliney,J.L.（1988）：*Island in a Far Sea　Nature and Man in Hawaii*, Sierra Club Books.

Geographical Space 1-1 53-70 2008

The Albatross and the Territorial Expansion of the Japanese Empire

HIRAOKA Akitoshi
Faculty of Economics, Shimonoseki City University

Adopting a viewpoint informed by action theory – i.e., interpreting people's behaviours from their purpose of actions – the author hypothesizes that the main purpose for Meiji-era adventurers and explorers in exploring the seas south of Japan was to hunt albatross . From this premise, he argues that the profit-driven advancement into the southern seas in pursuit of the albatross contributed to the expansion of the southern boundaries of the Japanese Empire.

Albatross were know from early times to some inhabitants of the Ogasawara Islands, and starting around 1885, the birds' plumage was exported to some foreign countries. The industrialist Han-uemon Tamaoki became involved in the albatross industry on Torishima (Bird Island), profiting greatly from it. Being a successful entrepreneur, he became involved with such pioneers of the South Sea exploration as Takeaki Enomoto and Shigetaka Shiga. In those days, when newspaper-run serialized adventures about developing uninhabited islands were widely read, Han-uemon was often featured in many newspapers and books, and the stories featuring his exploits contributed to an upsurge in expeditions to deserted islands. In this flurry of exploration, people who realized the potential profitability of the albatross industry started competing in a quest to locate and explore the numerous islands that were assumed to exist, and were marked as E.D.(Existence Doubtful) on the maps of the South Sea in use at the time. Consequently, this competitive hunt for imagined South Sea islands led to the discovery and appropriation of actual islands such as Minami Torishima (South Bird Island) by the Japanese Empire. And, to cap it all off, this excessive spirit of exploration resulted in the "Ganzis Island problem" in which the Meiji Government claimed a non-existent island, Ganzis, as their own, renaming the phantom island as Nakanotorishima.

In this paper, the author has clearly shown that the actions of those such as speculators involved in schemes to make fast, lucrative profits from the albatross plumage industry contributed to the expansion of the territory of the Japanese Empire.

Key words: purpose of action, albatross, existence doubtful islands, territorial expansion, the South Sea